

令和七年（二〇二五）三月二十七日発行
『大倉山論集』第七十一輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

日本女子大学創立者・成瀬仁蔵と六代森村市左衛門
——森村豊明会による支援——

片桐芳雄

日本女子大学創立者・成瀬仁蔵と六代森村市左衛門 ―森村豊明会による支援―

片 桐 芳 雄

目 次

はじめに

- 一 成瀬仁蔵（一八五八―一九一九）
- 二 森村市左衛門（一八三九―一九一九）
- 三 成瀬仁蔵と森村市左衛門との出会い
- 四 成瀬仁蔵と森村市左衛門との関係深化
- 五 教育学部開設へ―森村豊明会の全面的支援
- 六 森村市左衛門と日本女子大学校
- 七 森村市左衛門死去（一九一九・九・一二）
おわりに―成瀬仁蔵と森村市左衛門を結びつけたもの

はじめに―日本女子大学と森村市左衛門

一九七四年から一九八一年、日本女子大学から刊行された『成瀬仁蔵著作集』全三巻は、日記・書簡を含む本文が全二九〇四頁になるが、そこに登場する人名で、イエス・キリストに次いで二番目に多いのは森村市左衛門である。^①

また『日本女子大学成瀬記念館収蔵資料目録1』（日本女子大学成瀬記念館、二〇一四年）によれば、成瀬仁蔵宛の書簡数で最も多いのは、森村市左衛門である。このことは、森村市左衛門と成瀬仁蔵（及び日本女子大学）との関係が、きわめて深いことを示唆している。

しかし、成瀬仁蔵や日本女子大学と関係した人物としては、渋沢栄一の名が挙げられることが多い。たしかに、婦一協会の設立と活動、文部省の諮問機関・教育調査会での協力、さらには成瀬没後の日本女子大学第三代校長への就任などを考えれば、それは当然のことかもしれない。だが、以下述べるように、日本女子大学の教育そのものにおいては、森村と成瀬との関係はより深いものがあつた、と言えるのではなからうか。

なお、引用文は常用漢字とし、カタカナはひらがなに改めた。

一 成瀬仁蔵（一八五八―一九一九）

成瀬仁蔵は、長州藩周防国吉敷村（現山口市吉敷）^②に生まれた。吉敷は毛利六家の一つ吉敷毛利家のお膝元で、家臣の青年武士たちは宣徳隊等を結成して倒幕運動に積極的に参加した。

幼い成瀬もその影響を受けた。成瀬は後年、「私も男の一匹であつて Ambition があつた。（中略）大に志を立て、

世界と動かすよゝな事を仕たいと思ひました。」と語っている⁽³⁾。

成瀬は山口県教員養成所（現・山口大学教育学部）を卒業して小学校教員になったが、それは彼の Ambition を満足させるものではなかった。成瀬は、米国留学してキリスト教徒となつて帰国した同郷の先輩・澤山保羅^{ほうろ}と再会し、その生き方に深く共鳴した。これこそ成瀬の Ambition を満足させる生き方であつた。彼は、澤山牧師からキリスト教の洗礼を受け、彼が計画する大阪の梅花女学校の設立に参加し、その主任教員となつた。

その後成瀬は牧師となり、一八八六年、複雑なキリスト教事情を抱える新潟に赴任した。そこで新潟女学校を設立する一方、北越学館事件で内村鑑三と対立した。こうした経験を経て、成瀬はキリスト教研究のために米国に留学することを決意した。

一八九一年一月、ボストン郊外のアンドーヴァー神学校に入学した成瀬は、ウィリアム・J・タッカー教授の指導を受けた。タッカーは、「天国」は「地上」にこそ建設すべきだと考え、社会的実践を重視する神学者であつた。成瀬はタッカーのもとで、近代科学を受容して進化論を認め、聖書研究の自由を重視する「新神学」を学んだ。

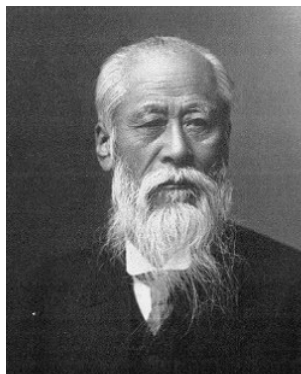
同時に成瀬は、米国において女性たちが、生き生きと活躍する姿に注目し、大学に入学する数の多さにも目を見張つた。この時期、米国女性の大学入学者数は急速に増加していた。日本もそうならねばならぬ、成瀬は女子大学創設の固い決意を胸に、一八九四年一月、帰国した。

しかしそれは、容易ではなかった。成瀬が日本女子大学の開校に漕ぎつけたのは、その七年後、一九〇一年四月二〇日のことであつた。



【図1】成瀬仁蔵

二 森村市左衛門（一八三九—一九一九）



【図2】森村市左衛門

森村市左衛門は、江戸京橋の馬具商の家に生まれた。^①成瀬仁蔵のおよそ二〇歳年長で、渋沢栄一（一八四〇—一九三二）、大隈重信（一八三八—一九二二）、福澤諭吉（一八三五—一九〇二）らとほぼ同年齢である。

森村家の当主は、代々市左衛門を名乗った。森村の幼名は市太郎であるが、一八四四年、六代当主となって市左衛門を襲名した。

一八五一年、見習奉公に出た。五五年には安政大地震で新築家屋を焼失するなどした。そうした森村の一大転機となったのは、一八五九年の横浜

開港であった。森村は横浜で外国商品を買入れ、これを江戸で売る商売を始めたのである。

一八六六年には、弟豊吉（のち豊と改名）を英語学習のため福澤塾（のち慶應義塾）に学僕として入塾させ、外国貿易にも対応できる準備を始めた。

一八七三年、洋服裁縫店モリムラ・テーラーを設立し、女性にも裁縫や読み書きを教える「森村女紅場」をテーラー内に開設した。さらに七六年には、豊と森村組を創立し、豊は福澤諭吉の勧めで単身渡米して、ニューヨークに日本からの輸入品を扱う店（森村ブラザース）を開いた。本格的な貿易商の誕生である。やがて義弟の大倉孫兵衛や、慶應義塾を卒業した村井保固^{やすたか}が、福澤の紹介でこれに参加した。

森村組は順調に発展し小売業から卸売業へと転換した。主力商品を陶磁器に移し、販売のみならず、製造にも力を入れるようになった。特に洋食器開発に力を入れ、一九〇四年には名古屋市則武^{のりたけ}に日本陶器会社を創立し、一九一四

年には純白磁器の完成に成功した。

今日よく知られる高級洋食器のノリタケや、衛生陶器の東洋陶器（TOTO）はもとより、のちにそのライバルとなった伊奈製陶（INAX）の事業もまた、森村組メンバーの援助を得たというのであるから、その影響の大きさに、驚かざるを得ない。

この間、一八九九年六月、長男・明六が死去し、七月、森村組経営の中心を担う弟・豊が急逝した。森村は、相次ぐ二人の死の哀悼のため一九〇一年二月、森村豊明会を設立した。後述のように、森村豊明会は、日本女子大学と深くかわるようになった。

三 成瀬仁蔵と森村市左衛門との出会い

成瀬仁蔵の忠実な協力者であった麻生正蔵は、成瀬が、大隈重信から森村市左衛門を紹介されたのは、一八九六年五、六月ごろであった、と証言している。そして麻生によれば、「本校開設前には故人（森村・片桐注）と本校との間にはまだ左程深大の関係は結ばれて居なかつた。」⁽⁵⁾と言う。

日本女子大学の創立活動を事細かに記録した「創立事務所日誌」（一八九六・七・一七起）に森村の名前が初めて登場するのは、一八九七年八月九日である。

同年五月二六日、外務大臣を務める大隈重信の来阪を受けて、中の島ホテルで日本女子大学校創立第二回発起人会が開かれ、その夕刻、第二回創立披露会が開催されて成瀬、大隈らの演説が行われた。この時の記録『女子教育演説』（青木嵩山堂、一八九七年八月）を贈った「発起人賛助賛成人等」として、森村の名前が出てくるのである。

その後成瀬は、資金の協力を求めて、何度も森村家を訪問しているが、面談できたのはわずかで、もっぱら「不在」であった。

他方、森村の側には、次のような回想がある。

私は最初あの人から女子大学設立の話を聞いた時は余り動かされなかつた。何故といふに斯ういふ事を遣る人の中には随分山師がある。唯名譽の為めとか、又是で金儲でもしやうなど、いふ考が心の奥に潜んで居る者が随分ある。成瀬さんも或はさういふ人でないか知らんと思つたのであつた。^⑥

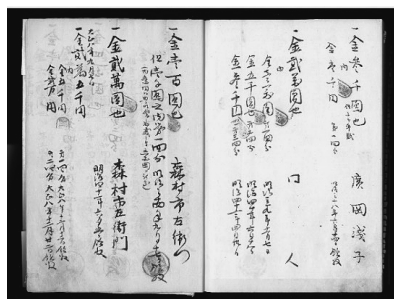
森村の「不在」は、居留守を使つたためではないか、などと想像をたくましくしてみたくなるのであるが、いずれにせよ、成瀬の要請に対して、当初の森村は、消極的な態度で応じた、というのは事実であつたようである。

四 成瀬仁蔵と森村市左衛門との関係深化

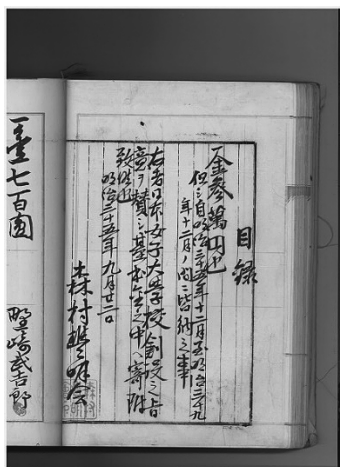
一九〇一年四月二〇日、日本女子大学校はようやく開校に至つた。

その二か月前、期せずして、森村豊明会が設立された。偶然とは言え、両者の時期が重なつた。

一九〇一年九月一七日、森村は、千円寄付のうち第一回分として「金壹百圓也」を寄付した（図3）。さらに一九〇二年九月二二日に、森村豊明会は同年一二月から一九〇六年一二月の間に三万円を「皆納」することを表明した（図4）。こうして一九二九年四月三〇日調の記録によると、森村関係者の寄付は、成瀬没後に募つた総合大学寄付金を除いても、森村豊明会として八万五千五百円、それとは別に、森村市左衛門、森村開作（次男）親子で十二万円、森村豊の三男・勇が一万二百円、森村市左衛門、大倉孫兵衛、村井保固、新井領一郎の連名で三万円、さらに、大倉



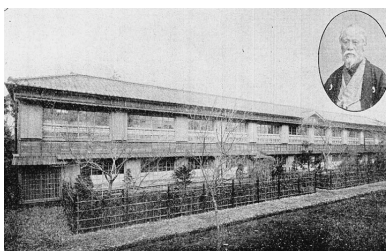
【図3】『寄附金収入簿』1899.7-1923.3
(D0096.p13)



【図4】『日本女子大学校寄附金簿』
1899-1924 (D2357・特別)

寄附者氏名	住所	寄附金額	備考
森村市左衛門	東京都千代田区	1000円	
成瀬仁蔵	東京都千代田区	1000円	
...	...	...	...

【図5】『資金トシテ千円以上寄附金調』
(1929.4.30調 D2109-2)



【図6】豊明寮と森村（『学報』第1号口
絵写真）

孫兵衛と妻・ナツ子で三万八千五百円などの、多きに達した〔図5〕。また大倉孫兵衛の義孫・大倉邦彦も一九一八年九月三〇日に二千元を寄付している（D0096.p5）。

この間、森村豊明会は、一九〇二年十二月、日本女子大学の校地の隣地を租借して、豊明寮と名づける学生寮一棟三寮（東・中・西）を新築し、一七日開寮式を行った〔図6〕。

成瀬に対する認識の変化を、森村は、次のように語った。

それで、まあ暫く様子を見やうと思ふて、それとなく能く注意して居つたが、段々歳月を経るに従つて、此人は決してさうではない、実に誠心誠意、心底から国家の為に女子教育の必要を感じ謂ゆる已むに已まれぬ精神で、凡べての名誉利欲を捨て、懸つて居る人であることを知つた。⁽⁸⁾

このようにして成瀬と森村との関係は、それまでには想像できないほど、深化していった。

日本女子大学校は一九〇四年四月一〇日、同窓組織・桜楓会を結成して第一回総会を開き、会員たちの社会的・実践的能力を育てるため、桜楓会実業部を開設した。そして、その顧問として森村の就任を要請した。

成瀬は、森村を実業部顧問に迎えるにあつて、「この女子大学の如きも広く委員方の賛助を仰ぐは、また多くの委員方の品性をも加へんとの意なり。」と述べたうえで、「今日森村氏に接する折をえたる吾れ等は、会に、個人に森村氏の品性を加へんと希望して止まざるなり。」と述べ、さらに次のように続けた。⁽⁹⁾

吾れ等の品性に両方面あり、即ち経済的品性、心靈的品性なり。こは二のものにて、互に一致する所なきが如く見ゆるも、実は二にあらずして一つなり、真の品性は、この二、相須^{あひたもつ}ちてこそ始めて完全なるものといふべきなれ、

「経済的品性」と「心靈的品性」は、本来一つである。すなわち「何事も経済的の主義を離れては、真の品性に達

せざるなり。さればとて心靈的を離るれば所謂守銭奴の無益のものとなり終るべし」。だからこそ「諸子は森村氏に接してその心靈的、經濟的品性を完備せらるゝ、点に鑑みて、各自補ひ、養ふ所あるべし。」と、会員たちに呼びかけた。

ともすれば、經濟的関心に乏しく、あるいはそれを蔑視することをもつて「上品」と考えがちな女性たちに向かつて、森村を紹介しながら、「經濟的品性の必要」を訴えたのであった。

これに対して同席した森村は、「凡そ事は実なくして価を求めんことは愚なり」と述べ、「今この校の生徒が実業部を設置し、たとへ親より教育費を送るをえぬものも、自ら働きてその費をえんとする即ち自給の道を開くときくは、誠に喜ばしきこと」と、經濟的に恵まれぬ学生たちをも励ました。⁽¹⁰⁾

五 教育学部開設へ―森村豊明会の全面的支援

成瀬と森村との関係が、さらに深くなる重要な契機は、一九〇六年の教育学部開設であった。

それに先立つ一九〇四年二月一日、日本女子大学校は教育学部開設の發表式を盛大に行ったが、この時の演説で成瀬は、夏休み前に森村宅を訪問した際、森村の側からある相談を持ちかけられた、として、次のように語った。

此の夏休みの前に一日私は森村君を木挽町の御宅に尋ねました。用談が済みましてから、君は何か大いに感ずる処があつて、改めて、私に話さるゝに、実は私から少し御相談したい事があつたのである。外の訳ではないが、私の既に此の世を去つた弟並に倅の今日迄存命致して居つたならば、何か御国のために尽す処があるであらうと考へるにつきまして、其の紀念として、立て、ある処の豊明会に或る財産を有して居るが、何か国家の急務とも

いふべき処の事業の為に、此の資を投じたいが、之に就て、何かよい考はあるまいか、願くば、お前に立案をして貰ひたいものであるといふお話でございました。私は充分に熟考し、且つ調査研究した後に、御答へしめしやうと申してお別れを申したのである。¹¹⁾

成瀬は、自らの案を、「独断的、主観的の判断に陥らぬ様に注意せねばならぬと思ひ」、大隈重信、渋沢栄一、時の文部大臣久保田譲、三井三郎助、岩崎弥之助、西園寺公望らに示し、これをもとに「第二維新を論じ我国教育の宿弊に及ぶ」と題する論文にまとめ、発表した。¹²⁾

論文標題に言う「第二維新」とは、「文明の上衣うはぎを装ふ」¹³⁾第一の維新に対して、その「上衣うはぎ」を着る人間を育てるための改革を意味する語として、成瀬がしばしば使ったものである。成瀬は、一九〇四年四月に挙行された第一回卒業式の講話でもこの語を使い、男性の手によってなされた第一の維新に対して、第二の維新は女性たちによってこそなされねばならないと、卒業生を励ましたのであった。¹⁴⁾

成瀬によれば、時は日露戦争下である。これは言うまでもなく、武力による戦争である。しかし「戦争」は、これにとどまるものではない。「世界的商工業の戦争」「知力的戦争」「天然（自然・片桐注）を征服する戦争」「精神的社会的戦争」があるのである。これらの戦争を戦う人間を育成するためには、根本的な教育改革が必要である。

その方策として成瀬が主張するのは、次の七点である。

第一に「記憶に依頼する試験的学問の弊」を改め、第二に「形式的、抽象的」な教育を否定し、第三に「社会、家庭、学校を連絡」する教育が必要であり、第四に「選択の自由、研究の自由」が重視されねばならず、第五に、このような教育のためには「研究的私立学校を組織」すべきであり、第六に、教育に対して積極的に資金が投じられねばならない。そして第七に「天然の良教師たる女子の教育家を輩出」することが重要である。

このようにして成瀬は、日本女子大学校に教育学部を設置する必要を訴えたのであった。

ここに、経済とともに、教育を重視する森村の意向が反映されていたことは明らかである。

教育学部設置発表式において成瀬は、上述のように、教育学部設置の経緯を詳しく説明し、他に 大隈重信、米国公使、渋沢栄一、久保田譲が演説をおこなった。

教育学部開設に当たり森村豊明会は、校舎等建築費五万円、器具費五万円、計五万五千元を寄付したが、同会から、次のような書面¹⁵が大学宛てに届けられたことも紹介された。

拜啓

森村豊明会員なる下名等は兼て貴校の教育事業に同情し、曩に多少の資を致して賛助の意を表し候処、刻下我邦前古木曾有の時局に際し深く国運の将来を慮かり候時は、我等国民が講究経営すべき幾多の事業前途に横はり候得共、就中国国民教育の基礎たるべき女子教育の今一層有効切実ならん事を望むものに有之、且つ過ぐる日、帝国大学に於て、文部大臣に賜はりたる御沙汰を拜して転た感激の至りに不堪、此の際聊か国民の本分を尽し度思考罷在候折柄、貴校に於て教育学部開設の計画あり、其の主義方針とせらるる所に關し下名等に示されたる貴下の意見書は大に下名等の感を同ふする所に有之、国家百年の大計に裨補あるべきを信じ茲に別紙目録の通り（一金五万五千元也）貴校に寄附し教育学部の費途に供し度、幸に貴校計画実施の一助と相成候はゞ下名等の深く満足する所に御座候、右得貴意度如斯御座候 敬具

明治三十七年十一月廿八日

森村豊明会

森村市左衛門 森村勇 大倉孫兵衛 村井保固 新井領一郎 広瀬実栄

永井義三郎 諸葛小弥太

そして同じく二月一日、日本女子大学の創立委員会は同校の財団法人化を決定し、森村と大倉孫兵衛が評議員に選ばれた。そして森村は、渋沢栄一とともに財務委員として常任委員の一人にも就任した。⁽¹⁶⁾

その二日後、二月一七日に行われた豊明寮落成三周年の記念日において森村は、自らの考えを次のように述べた。さきにこの兩人（明六と豊・片桐注）を記念せんが為め豊明会をおこし集めたる金員を以て、永く兩人の霊を慰めんとせり、然れども寺院に投ずるが如きは故人の志にあらず、国家繁栄の途を計らん為めに、捧げんと思ひし折り柄、今回女子大学拡張の挙を聞き、喜んでこれを投ぜり。地下にまた兩人手を携へて、満足の微笑をもらすならんと信ず。⁽¹⁷⁾

さらに翌年四月二〇日、卒業式に併せて開かれた第五回創立記念式兼教育学部・附属小学校・幼稚園校舍及び図書館（兼講堂）の定礎式において成瀬は、「この図書館は大倉孫兵衛氏の主唱により、同氏の一万円村井保固新井領一郎森村市左衛門諸氏の各一万円を始め、同（森村豊明会・片桐注）会員の義捐金になるものにして、建築費、図書費等、凡て四万円の予算なり」と述べ、しかしその間の事情を記した大倉孫兵衛の私信は、その意により公開することはできない、と付け加えた。⁽¹⁸⁾

このようにして成瀬と森村、あるいは日本女子大学校と森村豊明会との関係は、ますます強固になった。

一九〇五年八月、森村が米国旅行に出るときには、日本女子大学校で送別会が開かれ、出発に際しては、桜楓会会員が品川駅まで見送った。二月には帰国歓迎会が開かれ、「森村評議員歓迎会唱歌」⁽¹⁹⁾が作られた。

翌〇六年四月には豊明館等の落成式が行われ、四月二七日には教育学部と附属豊明小学校・幼稚園の開校式が行われた。



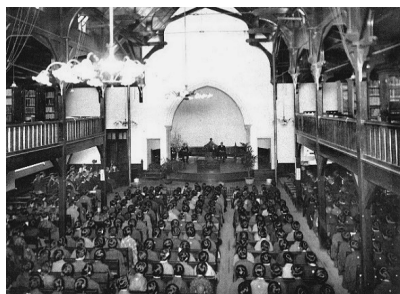
【図7】豊明館全景・左図書館兼講堂、右教育学部校舎



【図8】教育学部校舎



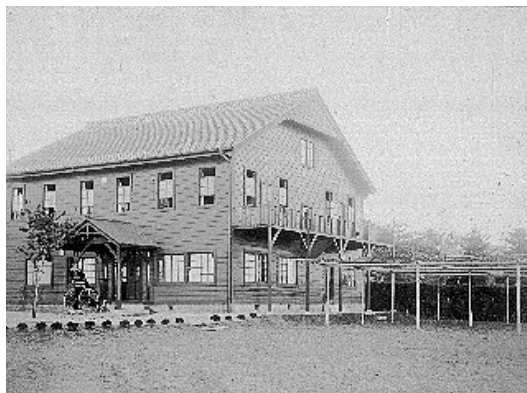
【図9】図書館兼講堂



【図10】講堂内部（2階に書棚が）



【図11】附属豊明小学校・幼稚園



【図12】幼稚園（曙寮）

さらに同年五月、大倉孫兵衛の妻ナツの寄付により、正門と道路を挟んだ反対側の「山寮内の眺望の殊に佳なる地」²⁰に、幼稚園、小学校児童のための幼稚園が設立され、曙寮と名づけられた。成瀬によれば、条件によつては、家庭よりもこのような寮で子どもを育てる必要があるのであった。²¹

この五月には、落成した豊明館等の視察のため、森村豊明会のメンバーが続々日本女子大学校を訪問した。森村夫妻はもとより、村井保固夫妻、大倉孫兵衛等であった。

その様子を報じた『家庭週報』六〇号（一九〇六・五・一二）は、ながら森村豊明会特集号になった。冒頭に「美はしき団体、森村豊明会の高風」と題する記事を書き、豊明会会員の談話を掲載した。

それによれば、森村は「一体私がこの女子大学に非常に同情を寄するのは、外ではない、成瀬校長の熱心なる献身的のやり方に真に敬服するからである。またこの精神と我が豊明会員と、意気相投するからである。」と語り、大倉孫兵衛は「此私の身の上話して御承知下さる様、無学の者も十二三の時の理想から、六十余才の今日迄理想は次第に進歩し苟も理想をたつるに及んでは決して達しえられぬといふ事はないことが明らかであります。とかく御婦人方には女だから出来ぬ。女だからすべきでないといふ御遠慮なすつて自分の理想丈け達しえぬ人がありますか。その様な弱い心は捨て、立派な理想通り精々立派な御成功をお遂げ下さる様に希望いたします。」と語り、さらに村井保固は「私は学問上のごことは申上られませんが、凡ての学問以外、今の三つの事、慈

愛 (Love) 至誠 (Truth) 美 (Beauty) といふことは (女性は・片桐注) 男子よりも余分に天然から授かつております。この宏大無辺の賜物は、真に女子の魂であると思ひます。」と語った。

これに対して成瀬は、「森村、大倉、村井諸氏の如きは、自ら「余は無学なり」と云はるれど、決して然らず、漢学の素養は深き上に、常に読書に於ても、研究を怠らぬを以て、白髪を戴きてなほ其の頭は新進の氣に充ち、世の文化に先つとも後るゝことなし。これ決して、無学にあらず、否これ真に学びし人なり。」とその人柄を称えた。⁽²²⁾

六 森村市左衛門と日本女子大学校

以上のように、日本女子大学校と森村市左衛門との関係はますます深くなり、それは私的な領域にまで及ぶようになった。

一九〇八年十二月、森村市左衛門が古稀を迎えるにあたって、『家庭週報』一六八号(一九〇八・一二・五)は、「森村市左衛門翁の古稀の賀」という記事を掲載し、その業績を紹介するとともに、その祝賀の会が、「徒らに佳肴珍味を連ね、管弦を弄び、多数の人が集まつて陽氣に騒ぐを以て、能事となすが如き輕佻浮華の傾きある」ものではなく、「質実なる賀筵」であつたことを報じた。⁽²³⁾

そして翌週の『家庭週報』一六九号(一九〇八・一二・一二)には「余が七十年間に苦戦して得たる賜物並に予の女子教育主義」と題する森村の談話を掲載した。そこで森村は、「私の望む良妻賢母は、たゞに針仕事をしたり、お菜拵らへしたり、小使帳をついたり、子供の世話をしたりするだけではなく、もつと進んだ良妻賢母である。」と語り、「世間には往々高等教育に反対する人があるが、男子であらうが、女子であらうが、世界第一の人間を作らない

でどうしやうか。人類が与ふ丈けの知識と体格と徳望とを備へる事を望まぬ人があるであらうか。我れ我れは女子教育がもつと高まらねばならぬと考へる。」と、女子高等教育に関する見解を述べた。⁽²⁴⁾

一九二〇年六月、森村夫妻の金婚式が行われたときは、式の翌日、遠く米国等からも参集した豊明会会員を女子大
学校に招き、豊明館の講堂で祝賀会を開いた。⁽²⁵⁾



【図13】森村夫妻の金婚式祝賀のため来校時の写真（『家庭』第2巻第8号1910.7.1）

他方森村は、日露戦争後、女子高等教育への進学者はむしろ減少するという苦境に立たされた女子大学校を支援するために、同年八月六日から一〇日間、成瀬や洪沢栄一とともに、北越地方への講演旅行に参加した。

成瀬によれば「森村さんは出立の二、三日前から頭痛に悩み、其の上井上子爵逝去の報に接して大いに心を傷めて居られたので、（令息森村開作氏夫人は井上子爵令嬢なり）私はどうかと深く氣遣つたが、なに行くと云つて水囊を戴いて出立された様な次第であつた」。⁽²⁶⁾

森村は、「私共は女子の高等教育が、必ず其の効力ある事を信じて、都合が出来ますならば、日本全国を巡回し、女子教育の必要を知らせ、私共も智を広めて行き度いと存じて居ります」。⁽²⁷⁾と語った。この北越講演旅行の講演内容は、これに同行した日本女子大学校幹事・塘茂太郎の編集で、『女子教育問題』と題する文書にまとめ

られた。⁽²⁸⁾

翌一一年五月に行われた創立一〇周年記念の関西講演会にも、森村は、渋谷、成瀬とともに参加した。

こうして森村は、機会に応じ、しばしば日本女子大学校に來校して、自らの体験や所感を述べる講話を、学生たちにおこなった。すでに紹介したものを含め、判明する限りのものを列挙すると、以下ようになる。

「森村市左衛門氏の講話」(『家庭週報』三三三、一九〇四・七・二三)

「森村市左衛門氏の談片」(同、一三三、一九〇四・一二・一〇)

「豊明会の由来 森村市左衛門氏の談」(同、一四四、一九〇四・一二・三一)

「森村市左衛門氏の談片」(同、二八三、一九〇五・七・一五)

「三月の旅」(同、四二五、一九〇五・一二・一)

「豊明会員の談(一) 森村市左衛門氏の談」(同、六〇三、一九〇六・五・一二)

「余が七十年間に苦戦して得たる賜物並に予の女子教育主義」(同、一六九三、一九〇八・一二・一二)

「人となれ高きを践め」(同、一八五三、一九〇九・五・一)

「油断なく進め 斯る強き人となれ」(桜楓会総会に於て) (『花紅葉』七三、一九〇九・六・一〇)

「古稀を越へし私が年一年と健康になり若返る訳」(『桜楓会通信』第三〇三、一九一〇・六・二五)

「精神に寿命を与ふるは長寿の秘訣」(『家庭』第二卷第八三、一九一〇・七・一)(右と同趣旨)

「信越地方旅行中実際に見聞したる教育の結果」(『桜楓会通信』第三二三、一九一〇・九・二五)

「諸子には重大なる責任あり」(『花紅葉』九三、一九一一・五・二四)

「殺すな無駄をするな」(『桜楓会通信』第四一三、一九一二・二・五)

「戦に勝つ人」(『家庭週報』二二九号、一九一三・四・一八) 卒業式での講話

「人間をつくれ」(同、一二七号、一九一三・六・一三)

「座談数言(一)」(同、二四二号、一九一三・一〇・一〇)

「座談数言(二)」(同、二四三号、一九一三・一〇・一七)

「国民個々の覚悟」(同、二八九号、一九一四・一〇・一六)

「不老の元氣」(同、三〇〇号、一九一五・一・一)

「卒業して行く人々に・教育ある婦人の責任」(同、三二一号、一九一五・三・二六)

「再び卒業生に・教育ある婦人の責任」(同、三二二号、一九一五・三・一二)

「婦人の自覚・桜楓会名古屋支部会にて」(同、三三五号、一九一五・一〇・一)

「婦人の自覚を俟つ・桜楓会名古屋支部会に於て」(同、三三六号、一九一五・一〇・八)

「人間の一念は成就せざる事なし」(同、四一六号、一九一七・五・一一)

「人間の一念は成就せざる事なし」(同、四一七号、一九一七・五・一八)

「卒業せんとする人々に(一)」「(三)」(同、四五五―四五七号、一九一八・二・二二―二三・八)

「新しき光を上げ」(同、四六四号、一九一八・四・二六)

「君の昇天を送る」(同、五〇八号、一九一九・三・二二)

「あまりに偉大にして語る能はず」(一九一九・四・二〇成瀬仁蔵追悼会にて『成瀬先生追懷録』三三〇頁)

「神の心を知れ」(『家庭週報』五一六号、一九一九・五・一六)

最後の文章で森村は、次のように語った。

私・が・先・生・か・ら・受・け・た・感・化・は・実・に・偉・大・な・も・の・で・あ・り・ま・し・た・。・そ・し・て・有・難・い・事・に・は・私・の・心・と・先・生・の・心・と・よ・く・一・致・し・た・や・う・に・思・ひ・ま・し・た・が・、・先・生・も・矢・張・り・さ・う・思・は・れ・た・さ・う・で・、・お・か・し・な・事・を・い・ふ・や・う・だ・が・あ・な・た・と・私・と・は・以・前・は・兄・弟・か・或・は・親・子・で・、・も・あ・つ・た・の・で・は・あ・る・ま・い・か・、・な・ど・、・い・は・れ・た・事・も・あ・り・ま・し・た・。⁽²⁹⁾

七 森村市左衛門死去（一九一九・九・一二）

一九一九年三月四日、成瀬仁蔵は、満五九歳で逝った。その半年後、九月一日に、後を追うように、森村市左衛門も逝った。満七九歳であった。

同年十一月一日、日本女子大学校は、豊明館の講堂で「故評議員森村男爵追悼会」を開いた。その様子を、十一月二日刊行の『家庭週報』は、「故森村男爵追悼号」として詳しく報じた。

成瀬校長の後任として第二代校長に就任した麻生正蔵は追悼の辞を述べ、「故人が私共に対して如何なる事を期待されて居たかは、その談話、演説、特に家庭週報に記載されて居る故人の意見に徴すれば、その大体を窺ふ事が出来ます」と述べ、さらに「第一に故人は婦人に対する理解ある同情者であつたのみならず、実に婦人の偉大なる能力を確信して居られたのであつて、従つて婦人に対する期待も亦大であつたのであります」「故人は偏狭極まる時代後れの賢母良妻主義を盲信するものでなく、社会の各方面に於て婦人の適所にその適材を発揮すべきを当然であると思はれた」と、森村の先進的な女性観を紹介し、その業績を称えた。⁽³⁰⁾

この他、当日は、大隈重信「卓越したる人格者」、洪沢栄一「国家といふ一念のみ」などの追悼の辞が述べられ、また、『家庭週報』同号には、大倉孫兵衛「女子教育に熱心な森村さん」、法華津孝治「幼時から今日迄の森村男爵」、

広瀬実栄「森村男爵の人格を追慕して」、山下亀三郎「男爵の教訓を本として」などの追悼文が寄せられた。³¹⁾

大倉、法華津、広瀬は、森村の同志であり、山下汽船で知られる山下亀三郎は、同郷の村井保固の紹介で大倉孫兵衛や森村に私淑した人物であった。

この他に柳八重子「観音経を誦せられた母君」、桜楓会名古屋支部K子「愛知教会に於ける故森村翁記念会の日」などの文が寄せられたが、彼女らは日本女子大学校卒業生、即ち森村が深く期待を寄せた桜楓会会員であった。

なお『家庭週報』は、一九二二年一月一七日に、評議員だった大倉孫兵衛が死去したときには、二回にわたってその業績を詳しく紹介し、³²⁾さらに孫兵衛の義孫・大倉邦彦が大倉精神文化研究所を建設したときは、その訪問記事を、二回にわたり連載した。³⁴⁾

日本女子大学校と森村豊明会との関係は、成瀬や森村の死後も、途切れることなく続いたのである。

おわりに―成瀬仁蔵と森村市左衛門を結びつけたもの

前引のように、「私が先生から受けた感化は実に偉大なものでありました。」と、森村は語り、他方成瀬は「あなたと私とは以前は兄弟か或は親子でゝもあつたのではあるまいか」と語ったという。³⁵⁾このように、両者を結びつけたものは何か。

以下、これまでの記述をも踏まえ、四点にわたって検討したい。

①女性観

森村が、自分の主張する良妻賢母は、家の中に閉じこもって、ただ「針仕事」をしたり、「お菜」を作ったり、「小使帳」をつけたたり、「子どもの世話」をするだけではない、「もつと進んだ良妻賢母」である、と述べたことはすでに紹介した。⁽³⁶⁾

他方、成瀬の主張する女性観は、「天職」を持つ女性であって、良妻賢母は、あくまでもその一つに過ぎなかった。この点で両者の良妻賢母観は重なり合う。

成瀬は、米国学中に「女性の領域」(Woman's Sphere)という概念を学んだ。それはホームを作することを第一にしながら、それにとどまらず様々な社会貢献活動にも従事することであった。それは、当時の米国で主張された「共和国の母」(Republican Motherhood)論に根ざしたものであった。⁽³⁷⁾

「共和国の母」論とは、森村が、「女子が一家を整理し、子女を教育するといふ事は将来の国民国家の基礎を作るので之れは女子の天職である。」⁽³⁸⁾と述べ、また「婦人は実に国民の母であり、同時に国民救済者の責任者であります、婦人の中でも殊に高等教育を受けた人々に、此の責任が最もかゝる所でありますまいか」「どうぞ今後は女子大学が根となつて、社会改良、婦人改善の実が挙げて戴き度い。」⁽³⁹⁾と述べていることでもあった。

どの程度自覚的であつたかは不明であるが、森村もまた、当時米国で主張された「共和国の母」論を、米国との交流の中で、体験的に身に着けていた、ということであろう。

②人間観

成瀬が、学生たちに向かつて「森村氏に接してその心霊的、経済的品性を完備せらるゝ、点に鑑みて、各自補ひ、養ふ所あるべし。」⁽⁴⁰⁾と述べ、「森村君が五十年間に養ひ来された経済的品性は、此桜楓会の品性となり、桜楓会の魂とな

つて、仮令森村君が死んでも、限りなく此の桜楓会の大きな木と共に身体と精神も發達して行くものである。」と、森村の「経済的品性」を高く評価していたことは、すでに述べた。

森村は学生たちに向かつて、「誠に労働は神聖にして、独立・自営の尊き境遇に遊ぶをうべし。まして女子に於て、たとへ大学卒業後とても、下女同様、櫛がけに働かばいかに周囲の人の刺激となり、模範となりうべきか。その感化は実に予想の外なるべし。」と述べた。

森村の「経済的品性」は、「労働」を神聖なものにとらえ、「独立自営」を良しとする、いわばビューリタンの人間觀に根ざしていた、とも言える。

森村は、「一朝国家に事あるに当りては、君国の為め潔く一命を抛つて顧ざる勇士は輩出せるに、何故、農工商の為め、一命を抛つの勇士乏しきか。」と現状を憂い、「私は商売人でありますから常に深く感ずるのは経済と云ふ事があります。」と、経済人にふさわしい矜持を語った。

森村の人間觀は、経済人としての、「経済重視」の考え方に根ざすものでもあった。

③ 国家觀

森村は、「何故に米国は斯くの如く非常に進歩を致したのでせうか。国民の自由、これが主なる原因でありますまいか。」と語った。

森村のこのような認識は、米国との交流を通して得た米国認識と、海外に眼を向けた、広い国際的視野に基づくものであった。そして森村は、「私は世界各国の話聞いて、日本の国民が益々覺醒し世界の・大・勢・に・眼・を・注・ぎ・、大に進まなければならぬといふ感じを一層強められました。」とも語った。

これは、前述の「共和国の母」論とも通底する。

森村のこのような国家観は、女子高等教育をはじめ、あらゆる問題を国際標準で考えようとした成瀬の国家観と、まったく重なるものである。

④ 宗教観

以上のような人間観や国家観は、二人に共通する宗教観に根ざしていたことは重要である。森村は「そう思ひますと今自分の財産と思ふ所のものも皆神の力で出来上つた財産であれば、従つて自分一個人のものではない。若しも国家の為に入用があれば何時でも是れを捧げるといふことは当然の事であると自然に考へらるるやうになりました。」と語り、さらに、「私欲の凡てから離れて犠牲の精神に充ちた時尊い靈の光りが仄に見えるのであります。」と語った。⁽⁴⁷⁾

森村によれば、「実に宗教といふものは宏大な力があるものであります。」⁽⁴⁸⁾ということであつた。

森村は、当初仏教を信じたが、晩年にキリスト教に転じ、洗礼も受けた。その一方で森村は、松村介石が、キリスト教を超えた東西融合の宗教をめざして創始した道会⁽⁴⁹⁾を支援した。松村介石は、共に、澤山保羅から洗礼を受けた成瀬の兄弟子といふべき人物であつた。

さらに森村は、成瀬が、姉崎正治や渋沢栄一と始めた婦一協会をも積極的に支援した。道会や婦一協会を支援したのは、大倉孫兵衛も同様である。⁽⁵⁰⁾彼らは、キリスト教を基本にしつつ、それにとらわれない、より広い宗教観を持っていた、という点で共通していた。

成瀬仁蔵と森村市左衛門は、開国と明治維新によつて一気に世界の荒波の漕ぎ出した日本を、世界の潮流に取り残

されることなく、世界の中の日本として、国際的視野のもとで発展させようとしたのであった。

そのためには、そのような国家を支える国民の育成が必要であり、開かれた視野と精神を持つ女性の力が必要だった。

健全な国家の創造を願い、成瀬は、国語の改良の必要を訴え、場合によっては国字に、ローマ字を採用すべきだと提案して、「ローマ字ひろめ会」の活動に熱心に参加した。この会は、日本女子大学の有力な支援者であった西園寺公望が初代会頭に、大隈重信が名誉会頭に就任したものだ。森村もまた、洪沢栄一とともに、「ローマ字ひろめ会」の有力な財政的支援者だったことは、今日、あまり知られていないが、最後に付言しておきたい。

（著者付記）写真は、明記したもの以外は日本女子大学成瀬記念館所蔵である。

（編者付記）本稿は、令和六年（二〇二四）五月十八日の大倉山講演会における「日本女子大学創立者・成瀬仁蔵と森村市左衛門」（横浜市大倉山記念館ホール）の講演内容に、加筆修正を加えて成稿したものである。

注

- （１）『成瀬仁蔵著作集人名索引』（日本女子大学女子教育研究所、一九九三年）。
- （２）成瀬仁蔵について詳しくは、拙著『評伝・成瀬仁蔵―女子高等教育から「社会改良」へ―』（風間書房、二〇二二年、日本女子大学創立一二〇周年記念出版）を参照されたい。
- （３）成瀬仁蔵「桜楓会ニテ」（一九〇五年十一月二日）『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述・実践倫理講話筆記・明治三十七・三十八年度ノ部』（日本女子大学成瀬記念館、二〇〇九年）一四〇頁。

(4) 森村市左衛門については、砂川幸雄『森村市左衛門の無欲の生涯』（草思社、一九八八年）、大森一宏『森村市左衛門―通商立国日本の担い手―』（日本経済評論社、二〇〇八年）のほか、森村自身の自伝的回想である森村市左衛門述・井上泰岳編『独立自営』（実業之日本社、一九一二年、のちに「完全復刻版・明治経営名著集」の一冊としてダイヤモンド社・雄松堂書店より一九七八年に刊行）がある。また、森村の談話をまとめた著作も多い。なお本稿と関連した論考として、福永郁雄「森村市左衛門と森村豊明会」（川添登・山岡義典編著『日本の企業家と社会文化事業』東洋経済新報社、一九八七年、所収）がある。

(5) 麻生正蔵「故男爵森村評議員を悼むの辞」（『家庭週報』五四二号、一九一九・一一・二二）。

(6) 前掲注4『独立自営』一九九頁。砂川幸雄・前掲書一七八―一七九頁参照。

(7) 「校報・校内記事」（『学報』第一号、一九〇三・七、一六三頁）中村政雄編『日本女子大学校四拾年史』（日本女子大学校、一九四二年）四四四頁。

(8) 前掲注4『独立自営』二〇〇頁。砂川幸雄・前掲書一七九―二〇〇頁参照。

(9) 成瀬仁蔵「経済的品性の必要」（『家庭週報』三号、一九〇四・七・二三）。

(10) 「森村市左衛門氏の講話」（同右）。

(11) 「成瀬校長の演説」（『家庭週報』一四号、一九〇四・一二・三二）。

(12) 成瀬仁蔵「第二維新を論じ我国教育の宿弊に及ぶ」（『学報』第四号、一九〇四・一二）

(13) 教育学部開設表式を特集で報じた前掲『家庭週報』一四号の冒頭に掲載された「第二維新の曙光」と題する論説。執筆者は不明であるが、成瀬の意を受けた書かれたものであることは明白である。

(14) ちなみに成瀬は、その後、一九〇九年一月一日の『家庭週報』一七二号に掲載された「今後五十年の大勢如何」と題する年頭の辞で、前年一〇月に出された戊申詔書の意を敷衍して「第一維新」と「第二維新」について語っている。なおこの談話は一九一一年に実業之日本社から刊行された『進歩と教育』に、「吾人の使命」と題して収録された。

- (15) 前掲注11「成瀬校長の演説」傍点片桐、以下同様。
- (16) 前掲注7『日本女子大学校四拾年史』一二七頁。
- (17) 森村市左衛門談「豊明会の由来」(前掲『家庭週報』一四号)。
- (18) 成瀬仁蔵「卒業生諸子に別れを告げ併せて本校の略歴現状の報告を述べ」(『家庭週報』二三号、一九〇五・四・二九)
- (19) 「森村評議員歓迎会唱歌」(『家庭週報』四三三号、一九〇五・一二・一六)。
- (20) 「日本女子大学校記事・幼稚舎の設立」(同右)。
- (21) 成瀬仁蔵談「幼稚舎設立に就て」(『家庭週報』五一号、一九〇六・二・二四)。この文章は若干改訂の上「児童教育と幼稚寮」と題し前掲『進歩と教育』に収録された。なお幼稚寮は入寮児童が少なかったため一九一三年に閉寮した(日本女子大学創立百年史編纂委員会『日本女子大学学園事典―創立一〇〇年の軌跡―』(日本女子大学、二〇〇一年) 三三七頁)。
- (22) 成瀬仁蔵「無言の感化」『家庭週報』六〇号、一九〇六・五・一二。なおこの談話は前掲『成瀬仁蔵著作集』には収録されていない。
- (23) 「質実なる賀庭・森村市左衛門翁の古稀の賀」(『家庭週報』一六八号、一九〇八・一二・五)。
- (24) 森村市左衛門「余が七十年間に苦戦して得たる賜物並に予の女子教育主義」(『家庭週報』一六九号、一九〇八・一二・一二)。
- (25) その様子は『桜楓会通信』第三〇号(一九一〇・六・二五)に掲載されている。
- (26) 成瀬仁蔵「北越に於ける女子教育奨励の巡回講演」(『桜楓会通信』第三二号附録、一九一〇・八)。
- (27) 森村市左衛門「信越地方旅行中実際に見聞したる教育の結果」(『桜楓会通信』第三三号、一九一〇・九・二五)。
- (28) 塘茂太郎編『女子教育問題』(精美堂、一九一二年五月)。
- (29) 森村市左衛門「神の心を知れ」(『家庭週報』五一六号、一九一九・五・一六)。
- (30) 前掲注5「故男爵森村評議員を悼むの辞」。
- (31) 同右。

(32) 同右。

(33) 「日本女子大学校評議員大倉孫兵衛翁の略歴」(『家庭週報』六四六―六四七号、一九三二・一・一三、一・二〇)。

(34) 「大倉山に落成した精神文化の殿堂」(『家庭週報』一二五―一二六号、一九三二・四・二二、四・二九)。

(35) 前掲注29「神の心を知れ」。

(36) 前掲注24「余が七十年間に苦戦して得たる賜物並に予の女子教育主義」。

(37) 成瀬の女性観については前掲『評伝・成瀬仁蔵』の各所で論じたが、とりあえず第八章「女性の領域」(Woman's Sphere)と女子高等教育―米国での模索―と終章の「女性観―「天職」のある女性」を参照されたい。

(38) 森村市左衛門「人となれ高きを践め」(『家庭週報』一八五号、一九〇九・五・一)。

(39) 森村市左衛門「諸子には重大なる責任あり」(『花紅葉』九号、一九一一・五・二四)。

(40) 前掲注9「経済的品性の必要」。

(41) 前掲注11「成瀬校長の演説」。

(42) 「森村市左衛門氏の談片」(『家庭週報』二八号、一九〇五・七・一五)。

(43) 「森村市左衛門氏の談片」(『家庭週報』一三号、一九〇四・一二・一〇)。

(44) 森村市左衛門「戦に勝つ人」(『家庭週報』二一九号、一九二三・四・一八)卒業式での講話。

(45) 森村市左衛門「三月の旅行」(『家庭週報』四二二号、一九〇五・一二・二)。

(46) 森村市左衛門「殺すな無駄をするな」(『桜楓会通信』第四一四号、一九二二・二・五)。

(47) 森村市左衛門「国民個々の覚悟」(『家庭週報』二八九号、一九一四・一〇・一六)。

(48) 森村市左衛門「卒業して行く人々に・教育ある婦人の責任」(『家庭週報』第三一一号、一九一五・三・二六)。

(49) 森村市左衛門「卒業せんとする人々に(三)」(『家庭週報』第四五七号、一九一八・三・八)。

(50) 星原大輔「世の為に田を耕す―大倉家三代の生き方―第三十八回研究所資料展の報告を兼ねて―」(『大倉山論集』第六五輯

『大倉山論集』第七十一輯 令和七年三月

（大倉精神文化研究所、二〇一九年）。